

大韓地質学会創立 70 周年記念国際シンポジウム参加報告

井龍康文・辻森 樹

大韓地質学会の招きにより、辻森執行理事（東北大）と井龍（国際交流特任理事・東北大）が、本年（2017年）の10月25日から28日に済州島で開催された大韓地質学会創立70周年記念大会に参加した。我々は、24日に日本を発ち、25日と26日に済州島に滞在、27日に帰国というスケジュールであった。

日本地質学会と大韓地質学会は、2007年以来、互いに隔年で学術大会を表敬訪問しており、2017年度は、日本地質学会が訪問する側であった。例年、大韓地質学会の年会は巨大な会場で行われるようになっており、今年の会場は済州島国際コンベンションセンターであった。大韓地質学会の厚意により、我々は同センターに隣接するJeju Booyoung Hotelに滞在した。なお、学術交流協定を交わしている日本地球化学会からも、塚本尚義会長（北海道大）、平田岳史副会長（東京大）、鈴木勝彦評議員（海洋研究開発機構）の3名が来賓として参加した。

24日は、済州島空港まで迎えが手配されており、到着後直ちに焼肉店に招待され、大韓地質学会の国際交流担当役員であるROH, Yul教授、CHOI, Sung-Hi教授（ともに忠南大学校）とKim, Gyoo-Bum教授（大田大学校）に事務局職員2名（女性）も加わって、済州島名物のオギョブサル（5層になっている黒豚の焼肉）に舌鼓をうちつつ、済州島産の焼酎を味わった。さらに、ホテル到着後は、大韓地質学会会長であるHUN, Min教授（全南大学校）が訪ねて来られ、二次会となった（写真1）。初日からの歓待に恐縮した次第である。

25日には、日本地質学会・日本地球化学会からの来賓5名が、学術セッションにおいて、それぞれ、20分の講演を英語で行った。海外から5名もが参加したのは日本だけであり、日本の地球惑星科学のコミュニティーのプレゼンスを示すことができた。同日午後には、日本地質学会と大韓地質学会の学術交流協定の更新が行われた。更新のために、会場の中の豪華な個室が準備され、プロのカメラマンが撮影する中で、個々に談話を述べ、協定書にサインした（写真2）。その後、今後の両地質学会の学術交流に関して話し合いの時間をもった。同日の夕方には、大韓地質学会の創立70周年を記念する式典が行われた。式典会場の入り口で、縁起物の菓子3種類が配られた。式典中、この菓子を食べてもよいとのことであったので、式典中に1つ摘んでみたところ、南九州の炒粉餅（いこもち）に似た餅であった。式典では、まず、若手研究者による記念講演が行われた。それに引き続き、来賓の紹介と挨拶があり、井龍および塚本が祝辞を述べた。式典中には、大韓地質学会70年の歩みを紹介する動画が上映され、非常に印象的であった。この動画は、大韓地質学会の年会や地質巡検、韓国で開催された国際会議・シン

ポジウムの写真を集めたもので、2016年にケーブタウンで開催された第35回万国地質学会議における2024年万国地質学会議（釜山）の招聘活動の写真で締めくくられていた。なお、写真の中には木村 学元会長のアップも含まれていた。式典終了後には、大韓地質学会の現および旧執行部との懇親会が催された。

26日には日本語が話せる現地ガイドによる巡検が行われた。済州島は火山島で、この島にある漢拏山（ハルラサン；標高1,950 m）は韓国の最高峰である。2010年には、済州島全域が「済州島ジオパーク」として世界ジオパークネットワーク（GGN）に認定されている。ツアーでは、サングムブリ、城山日出峰（ソンサンイルチュルボン）等を訪れた。サングムブリは、韓国語で「凹んだところ」という意味で、漢拏山斜面に形成された、直径750 mほどの火口の跡である。訪れた当時は、一面がススキで覆われており、美しい景観を味わうことができた。ソンサンイルチュルボン（標高182 m）は済州島の東南端に位置する、10万年ほど前に形成された火山である。観光地として整備されており、「頂上」までの階段を登ると（といっても、かなりの急登になるが）、噴火口跡（直径約600 m）をみることができた。巡検終了後、直ちに、バンケットに参加した。バンケットには、安藤寿男執行理事（茨城大）が率いるIGCP 698「白亜紀アジア-西太平洋生態系」のメンバーも参加した。まず、バンケットの開始に先立って、済州島の古楽器（復元品）を用いた楽曲が披露された。打楽器を中心とした迫力ある演奏に、万雷の拍手が送られた。大韓地質学会の要人の発声による乾杯が続く中、井龍も挨拶と乾杯の発声を行った。

27日の帰国に際しては、済州島空港まで大韓地質学会のKIM, Gyoo-Bum教授（大田大学校）に同行していただき、空港でも多くの会員の方々から、丁寧な挨拶を受けた。4日間の歓待を深く感謝し、帰途についた。

両地質学会の学術交流協定の更新後の話し合いで最も重要な案件は、2024年万国地質学会議（釜山）に対する日本地質学会の協力であった。日本地質学会は、同会議の前後に行われる地質巡検に10コースを実施することを約束していることを確認し、2018年から互いに窓口を設けて、準備を進めていくことで合意した。また、同会議に向けて日韓の研究者の交流を活性化させ、セッションの企画・実施に結びつくよう、中堅研究者に呼びかけることで合意した。

日本地質学会と大韓地質学会との交流は、確実かつ強固なものとなりつつある。政治的には冷え切っている日韓関係であるが、われわれは地球科学者として相互の交流に努め、研究の発展に尽力すべきである。今回の韓国訪問が、そのための1ステップとなることを祈念して止まない。



写真1（左）. 大韓地質学会会長を囲んでの24日二次会。左から、Roh氏、Choi氏、Kim氏、井龍、鈴木氏、Huh会長、Eon-Jeong Wee氏（GSK事務局）、辻森、Yeong-Hee Yu氏（GSK事務局）。

写真2（右）. 互いの協定書を持ち笑顔で握手するHuh会長と井龍。